

指方立相についての一考察

小島 哲 彦

こゝに指方立相についての一考察としたのは淨土についての部分的考察とし、又この考察の主眼を指方立相淨土の緣由並びにその用語の意義と主張におき、二つの考察として主に通緯、善導の説に従つていかんとするものである。先づその緣由よりみるに

西方極樂の起源或はその緣由を尋ねるに、望月氏の説には①「西方極樂の起乘に關し、その著 *Buddhism in China* 中に玄奘比叡の沿岸に存る *Sacatra* 即ち *Schadharava* 嶋が古來彼の國人の爲に樂園として憧憬せられたことを指適し、*Schadharava* の語は *Subashira* *sati* と同義であるから彼の淨土の思想は即ち此小嶋に淵源するものであり云々」と述べられているが、此の西方極樂起源説に關して、「今の説の如きは餘りに突飛で他に確たる文獻の保証するものがない限り、一般に是認せらるるべきでもない云々」と述べられ、この説に対して否定的な態度を示してあられる。今この説は氏が「ピール氏の説を引用せられて述べてあられるが、この説を引用して述べられた人に「矢吹氏の説がある。即ち②「ソコトラ島は古よりして人の極樂世界となせしところ、抑も日没の時、西天の美なるを見、其附近、黄金香料寶石其他種種の物を生ずるや人以此極樂世界となし、一切富饒にして悅樂極まりなしとせり云々」と述べられ、この説に対して氏も同様にこの説に対して「論據の薄弱なる半し」、「印度と西方

諸國との交通頻繁なるが、亞利比亞思想の印度に伝わる痕迹尙未詳とし、「亞利比亞人か、此の説を印度に伝えた」と云ふ事實上の證明を欠いている。其の三つの疑問説をもつて、「畢竟此の説は暗索に通さず」として否定的論証を示されてゐる、かくの如くヒール氏の西方極樂起源説は兩氏とも明確なる肯定をさけてあらわぬ、面より見てこの説は半否定的な説とみられよう、更に望月氏の説を引用してゐると、^③「西方は太陽の没處でそこには太陽の安息處がある」と考へられたことも道理のあることであるから、弥陀の太陽擬人説は認め得べきでないにしてもその淨土を西方に置いた事は、或は彼の神話に關係があるかも知れぬところもはれる云々」と述べられ、この他にも都市の名林より^④発生したものや、或はケルン氏の夜摩天起因説、エドギンス氏の寂期の無限の光明神としてのアルムズに基因するもの等をあけてあらわれる、尙矢吹氏の説としてこれを見るに氏は大体望月氏と類する説を述べてあらわれるが、氏の説の一部分をあけてみるに、^⑦「耶摩の世界を人生至上目的と考へ理想極樂と見做し「至高之地」「解脱之門」といつてあり。云々し、或は「^⑧人の死後至るべき世界を以て日の没する西方にありと考ふるに至り、仏教に於ける西方淨土が多少日没と關係せらるる爲にその説明を得べく極樂の起源は耶摩に在りといふべし云々」と。更に「^⑨弥陀の夜摩天界 *paranirvāṇa* は幽冥なる地獄にありて受天の光明經にあり、人間死後の靈魂は夜摩天に攝受せられ、(中略)夜摩天の御土は正に仙教の弥陀淨土の粉本といふも可なり」とされて弥陀淨土の発生する思想の萌芽であると論じられてゐる。

以上簡單ながらその大畧を記述したが、要するに西方淨土、或は畢に弥陀淨土は太陽神話に基づくもので、西天の没入状況を人間の死と連關したり、更に夜摩天の理想的世界觀等を現象

の極く人間の理想的投射の世界としてみてあり、これより極楽浄土の歴史的なる発祥とその緣由を伺い知る事が出来る。尚この他にも二此に關する種々の説が見受けられるが、この考察はこの程度に留めんとする。

次にこの用語の意義乃至はその主張をみるに、これを経陀至に引いていへば、至説の区分上⑩「正泉分」の中の「總明極樂依正二報」の中總標依正二報にあたる、即ち至に「從」見西方過十方便仙土一有「世界一名曰「極樂」其土有「仙苑」阿彌陀「今現在說法」とあり、或は大至には⑫「法藏菩薩今已成仙現在西方」去此十方便刹其仙世界名曰「妙樂」とあり、共に指方立相たる西方十方便仙土を示し、阿彌陀仙の今現在說法の土をもつて極樂としてゐる。

尚參考迄に觀至の説をあゆむ⑬「仙告」韋提希汝及衆生施、當專心繫念一處想於西方云何作「觀」又作觀者一切衆生自非「生信」目之徒皆見「日沒」當下起「想念」正坐西向端觀於日「上」と説き出てあり、日沒の想念より西方を觀想する事を述べてゐる、次に指方立相の意味及その主張せんとする處を略述せんに、道緯はこれについて⑭「觀」生「十方淨國」不レ顛倒「西方」と説き出、十方淨土に觀生するより西方淨土に觀生すべき事を述べ、又⑮「娑樂世界既足淨土初門既闢」此方「境」相將往生甚便云々とし、娑樂世界を淨土所入の初門となし、かつ此娑樂世界と境相將するが故に往生甚だ便でありとし、又更にこれに便となす由縁は、⑯「阿彌陀國既足淨土初門娑樂世界即開闢土未處云々」とある如く穢土の未處は淨土の初門と境界相將するが故に、即ち距離的乃至は次元的に未初の開闢にある事を云つてゐる、尚又⑰「法藏菩薩願取」西方「妙仙」今現「在彼」とある如く法藏が願心のうちに望んで西方を建立せられた事を説き、法藏菩薩自ら西方淨土を十方淨土の中より選取された事を云つてゐる。

又次に^⑮「韋提夫人復稱＝淨土＝如來名爲現＝十方一切淨土＝韋提夫人曰＝此諸仏土雖＝復清淨皆有＝光明＝我今樂＝生＝極樂世界阿彌陀仏＝云々」と説き、韋提夫人が西方極樂世界阿彌陀仏の土を所求の土として十方淨土の中より特に西方樂生の處を示された事をいふ事たものである。

道綽の説の終りとして、^⑯「阿曰何故要稱＝西言＝西生礼念觀＝普召曰以下南菩提云＝日出處一名＝生沒處名＝死籍＝於死地＝神明趣入其相助使＝是故法藏菩薩觀彼仏在＝西遊＝攝衆生＝云々」と述べられ、西方が日没の場であり、かつこの場を死地となし神の趣入せる土である事をもつて西方を定める事の利便ありと爲し、もつて法藏菩薩が成仏し西にありて衆生を導引するものであ事を述べている、この説より察して、道綽の西方説は實に興味あり、又内心の存する説でもあると云えよう。

こゝは道綽の弟子台導の西方説を考察するに、台導の著觀至定台教卷第三には^⑰「阿曰韋提上請願＝愿＝極樂之境乃至如來許説即先教住心觀曰有何意也答曰此有＝三意＝一者欲令＝衆生欲＝境住心持レ方有レ在不レ取＝冬夏兩時＝唯取＝春秋二際＝其曰是正東出直西沒弥陀仏當＝日沒處直西超過十萬億刹＝云々」とあり、又法華會上には^⑱「便＝釈迦諸仏不レ捨＝慈悲道指西方十萬億刹上國名＝極樂＝仏号＝弥陀＝現在説法其國清淨具＝四無量宏＝云々」とあり、法華會上にも^⑲「一切仏土皆悉淨凡夫執惡難レ生如來別指＝西方國＝從レ是超＝過十萬億＝七寶莊嚴最爲勝云々」と説かれてゐるが如く共に釈尊が西方を指示された事が何かがわかる。こゝから引用文よりみて西方淨土は凡夫の執惡心により特に十方淨土の中より定められ、こゝはひとえに凡夫の機情、機故にもとづいて示されたものであり、釈尊の口説たる台巧方便

により指示される事が察せられる。

次に治導の指方立相の主張とする説の中で最も意義深きものとして「在西時現小」の語をあげる事が出来る。即ち治導の往生秘讃には③「已成＝窮理聖＝眞有＝通聖藏」在レ西時現レ小但是暫隨レ機云々」とあり、この事は治導の定治教、法華讃の上下巻の夫々より引用した文に相通するものであらう。即ち此の文に於て如來が無上正等覺を成就して十方の世界にその威光を照らし、或は衆生救済の悲願をもつて通く平等にその慈悲をたれたらうか、又夫の救済心により、十方世界の中より特に西方を示現された事を云つたものである。又治導の説より見てこのように説かれた事の深意を把握せねばならぬ。前述した文より察して一見量的な感をもつておけるが、この案に關して定治教の中にこれと相関連した文があげられる、即ち④「天親讃云觀彼世界相一勝過三耶道一究竟如＝虚空一廣大無＝辺際一此即總明＝彼國地之分量一也云」と述べられており、天親の⑤「國土十七種莊嚴の量功徳の文を引用されて西方淨土の國土の量を示して説いておられるが、この説より關係して釈良采の「論註記」に展開しの中には⑥「彼所生土既是有相淨土也能生機亦是眞際反天也何西宣云＝无边際一故秘讃云在西時現小但是暫隨機矣正報既有＝分限一依報何背云＝周圍無際一但今无边際者約＝苞容用一是有量重量也云々」とあり、在西時現小の引文を用いて有量重量を論述してある。正報に分限あるも依報は周圍無際と云ふ事を苞容の例に解して有量之無量なる事を述べ、又次に「依レ理判レ事時相淨土可レ无＝辺量一苦難レ性存レ相時可レ有＝淨土際限一是即性相不二百矣周圍無際淨土也云々」と説かれ淨土の有量、無量を事理の或は性と相の立場にもとづいて解釈してある。尚又天親の量功徳の文についても⑦「極樂廣大如虛空者是約＝円融一非＝唯事一言極樂設難レ有＝分限

圓融故苜蓿死窮也云々」として、円融なる契にもとづいて現る場合極樂は事の分限有るもこの
 円環融合の功きより現るとその結果、淨土は結極苜蓿無窮の狀態であるとしている。立場に基
 づいて夫々の説がたてられるものであつて、全体的見地よりしてこの欠缺は相互円融的乃至円
 環的內含的な性質を包含している事といえよう。かくの如き説より見て、指導の「莊西時現小」
 なる契に留意した場合に、西方淨土は小として、示現されたものであり、有餘の世界は大なる
 世界をその背後に有しているものと云えるが実は、これは前述せる如く円夫の散乱心の爲咎易
 に淨土願生の意をたてる事は困難なる故に釈尊の口説たる治巧方便としてたてられた世界であ
 る事は既に述べたが、結極は円夫の枝散にもとづいて施設されたものであり、指導の創意によ
 るものであるが、大より小を現すると云う説の裏には両者の相互円環的な狀態の世界を認め、
 更に仏の救生救済の爲の大慈としての治巧方便の仏意を了知しなければならぬ。換言すれば、
 「已成菩提理眞有衛堅成」が「現小」にそのまゝ、即していかねばならない。この両者の欠缺が
 今考察してきた如く大より小を、無辺より有辺、無量より有量と云う對果に帰せられるもので
 ある。指導の往生礼讃には⁽²⁸⁾「殊陀身量極無辺重鈔ニ衆生一體ニ小身一丈六八尺隨レ核環円
 老他仙等ニ前眞一」とあり、殊陀の身量は無辺であるが衆生を攝化せんが爲に小身を現じ、丈
 六八尺の身量は核に隨つて現じ、円老他佛となつてその身量を現じて無量より有量に數換され
 又數舟轉には⁽²⁹⁾「四十八願因レ法慈一願往生」一一舊體爲ニ衆生一（無量衆）衆聖莊嚴名ニ極
 樂一（願往生）仏大覺平等無二限重一（無量衆）とあり、前引の文に及し極樂の土を説明して無
 辺より有辺を現する事をこの文は示している。そして前者は淨土依正二報莊嚴の中正報を示し、
 後者は依報を説いている。二仏らの両者は共に相互円融的に、大より小を現じ、無量身より有

量身を廻じ、無辺より有辺を示現し、もつてこの両者が、互に仇き合ひ照し合つて衆生救済の爲の一大作用を形成している所に「在西湖現小」の意義が、又その主張が存するものと云えよう。別言すれば、善導の戒の宗教的自覚にもとづいたところより発するものであり、弥陀大徳の環境とその悲接の意を体得しなければならぬ。

以上不充分ながら指方立相の緣由と、西方淨土の意義主張を畧論した次第である。

(研究室員 田田生)

註

- 1 淨土教の起源及発達(望月信亨著) P. 680
- 2 阿彌陀仏の研究(矢吹慶喜著) P. 72
- 3 淨土教の起源及発達(望月信亨著) P. 681
- 4 " P. 680 - 681
- 5 " P. 462
- 6 " P. 462
- 7 阿彌陀仏の研究(矢吹慶喜著) P. 72
- 8 " P. 73
- 9 " P. 73
- 10 概説阿彌陀經(坪井俊政著) P. 187
- 11 淨土宗全書一卷 P. 52
- 12 " P. 12

13	〃		P. 40
14	〃		P. 684 r
15	〃		P. 685 r
16	〃		P. 685 r
17	〃		P. 702 v-r
18	〃		P. 702 r
19	〃		P. 702 r
20	浄土宗全書二卷		P. 35 r-r
21	浄土宗全書四卷		P. 4 r
22	〃		P. 16 r
23	〃		P. 376 r
24	浄土宗全書二卷		P. 38 r
25	浄土教の起源及発達（望月信亨著）		P. 753
26	浄土宗全書一卷		P. 474 r
27	〃		P. 474 r
28	浄土宗全書四卷		P. 372 r
29	〃		P. 530 r